The Image of Ireland in the Songs of Irish Americans : From Exile to Heaven

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 夏目, 康子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6861

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



大妻女子大学紀要―文系―　No. 52, 令和 2（2020）年 3 月

アイリッシュ・アメリカンの歌における アイルランドの表象

―― 追放された国から Heaven への道 ――

夏　目　康　子

【キーワード】 アイリッシュ・アメリカン，アイリッシュ・ソング，移民，天国，追放者

アメリカでは，19 世紀半ばから 20 世紀初頭にかけて，歌詞や楽譜を印刷したシート・ミュージック（sheet music）と呼ばれるものが大量に出版された。音楽好きのアイルランド系移民の需要が多かったので，アイルランドを題材にしたものが多く，アイリッシュ・ソング（Irish song）やアイリッシュ・バラッド（Irish ballad）とも呼ばれた。20 世紀になると，ブロードウェイなどのミュージカルで上演され，そこでヒットしたものは楽譜の形で売られることもあった。本稿では，このアイリッシュ・ソングのうち，題材として祖国アイルランドのことを歌ったものをとりあげ，19 世紀の歌におけるアイルランド像と，20 世紀の歌におけるアイルランド像を比較し，アイルランド系アメリカ人における祖国の意味を探る。19 世紀の歌のなかで描かれるのは，飢饉，強制立ち退き，地主の横暴などで疲弊したアイルランドの姿である。それに対して，20 世紀初頭の歌で描かれるアイルランドの姿は，緑なす丘と谷，歌う川，居心地の良い家，優しい村人という光景である。なぜ世紀をまたいでこのような変化が起こったのかを読み解くのが本稿の目的である。

一次資料としては，ジョンズ・ホプキンズ大学（Johns Hopkins University）が所蔵するリリー・ライブラリー・コレクション（Lily Library Collection），インディアナ大学（Indiana University）が所蔵するレヴィ・コレクション（Levy Collection），ボストン・パブリック・ライブラリー（Boston Public Library）が所蔵するシート・ミュージックのコレクションを使用する。

この分野はまだ研究が少ない分野だが，アイリッシュ・ソングについて包括的にまとめたウィリアム・H・A・ウィリアムズ（William H. A. Williams）の『それがただアイルランド人の夢だ』*'Twas Only an Irishman's Dream*（1996）がある。また，歴史的にアイルランド人がアメリカに同化していく過程を分析したものとして，ジェイ・P・ドーラン（Jay P. Dolan）の『アイリッシュ・アメリカン』*The Irish Americans*（2008）などの書がある。しかし，個々のテーマごとに歌を分析したものは少ない(1)。本稿では，アイルランドを描写するキーワードがどのように歌に現れるかに着目し，アイリッシュ・ソングにおけるアイルランド像の変遷に焦点をあてる。また，アイリッシュ・アメリカンにおけるアイルランド像の変遷の観点から，パレードなどで盛大に祝われるようになった 3 月 17 日のセント・パトリックズ・デイ（St. Patrick's Day）の意味についても考察する。

1　19 世紀のアイリッシュ・ソングにおけるアイルランド像

まず 19 世紀のアイルランド移民の歌を，それぞれの歌のキーワードから検討していく。19 世紀のアイリッシュ・ソングに歌われたアイルランド像は，大飢饉による飢餓と貧しさ，地主による横暴，母国からの追放といった，深刻で生々しい状況を歌っているものがいくつかある。アメリカに渡ってきてもなお，アイルランド人は母国の窮状を忘れることはなかった。歌には，祖国に置いてきた父母，兄弟姉妹，そして美しい自然への思いが綴られることが多い。まず，19 世紀半ばに出版された歌を検討しよう。

⑴ 「美しいアイルランドから悲しくやってきた，あるいは，エメラルドの島からの移民」(2)

“From Lovely Erin Sad I Come or The Emigrant From the Emerald Isle” by Charles H. Gerken, New Orleans（1848）

From lovely Erin sad I come,
Across the rolling sea.
In stranger land to seek a home,
A home of liberty!
My green and flowry native Isle,
Thy bloom is lost to me!
But where is nature’s sweetest smile!
Where, but among the free!
But where is nature’s sweetest smile!
Where, but among the free! …（下線筆者）

この歌では，liberty や free という「自由」がキーワードである。自分がなぜアイルランドからアメリカにわたってきたのかが歌われている。自由を求めて大西洋の荒波を超え，アメリカに渡ってきたが，美しいアイルランドを愛する心は変わることがない。自由を求める心が熱く語られる。自分がアイルランドで受けた心の傷を，自由の国アメリカが癒してくれることを切に願っていることが歌われる。1848 年にニューオーリンズで出版された。表紙には，一人の女性が噴水を前にして木の下でアイリッシュ・ハープを弾く姿が描かれている。楽譜と歌詞が 3 ページにわたってあり，丁寧なつくりになっている。

⑵ 「バーニー，国へ帰っておいで！」

“Barney, Come Home!” by W. Chambers, Philadelphia（1871）

I have just got a letter from my dear old mother,
She wants her dear boy to come home;
But that I can’t do dear mother, for you,

I'm an Exile and here I must roam.
She says her heart's breaking, and no one to help her,
The cot you were born in is now all alone,
Your father is dead so think of my trouble,
Barney, dear Barney, oh, will you come home?

Barney, come home, sure it said in the letter,
I know she is old and I cannot forget her,
I'm an Exile from Erin in America I roam,
When Ireland is free, mother,
Your Barney'll come home….（下線筆者）

この歌では Exile「追放者」と「残してきた未亡人の母」がキーワードである。独立運動に関わったために追放の身となりアメリカにやってきたバーニーが，故国の母から帰っておくれという手紙を受け取る。母はイギリス女王の恩赦を希望し，息子の帰国を望む。父はすでに亡く，故国に残した母を気遣うが，バーニーは，「アイルランドの石の十字架の上に太陽が輝くまで　帰らない」と決めている。つまりアイルランドがイギリスから正式に独立を果たすまでは故国には帰らないのである。独立運動のために故国を追放され，残してきた母を思う青年の姿が描かれた歌である。1871年にフィラデルフィアで出版された。1枚のシートにタイトル，歌詞，出版社，出版地，作曲・作詞者の名前が記されたシート・ミュージックであり，楽譜，絵は無い簡便なものである。作曲，作詞をしたのは，Billy Chambers（c1833〜1879）である。"Words and Music by Wm. Chambers, the Irish Clown" と記され，自らを「アイルランドの道化」と自負している。

⑶ 「アイルランドよ　永遠に」

"Erin Go Bragh", Boston（19c 後半）

There came to the beach a poor exile of Erin,
The dew on his thin robe was heavy and chill,
For his country he sigh'd when at twilight repairing
To wander alone by the wind-beaten hill.
But the day-star attracted his eyes and devotion,
For it rose on his own native Isle of the ocean;
Where once in the flow of his youthful emotion.
He sang the bold anthem of "Erin Go Bragh".

'O sad is my fate!' said the heart-broken stranger,
'The wild deer and wolf to the covert can flee;
'But I have no refuge from famine and danger,
'A home and a country remain not for me.
'Ah! Never again in the green shady bowers,

‘Where my forefathers liv’d shall I spend the sweet hours,
‘Or cover my harp with the wild woven flowers,
‘And strike the bold numbers of “Erin Go Bragh” ….（下線筆者）

タイトルにもなっている Erin Go Bragh とは，アイルランド語の Éirinn go Brách を英語化したもので，Ireland Forever の意味である。この歌も「追放者」がテーマである。「野生の鹿や狼は隠れ場に逃げられる／「だが私には飢饉や地主の横暴から逃れる避難所はない」と嘆く。アイルランドの飢饉や地主の横暴から逃れてきたという理由が述べられている。兄弟たちは，死んでしまったか，自分を非難するかのどちらかで，二度と抱擁することはない。孤独な追放者の姿が浮かび上がっている。「アイルランドよ　永遠に」の歌を奏で，せめて望郷の思いに浸ろうと嘆く。この歌には，独立運動，追放，異国での孤独，望郷という，前出の⑴番の歌と同様に，切実な要素が込められている。19 世紀後半にボストンで出版された。1 枚のシートに歌詞を収録し，楽譜や絵は無い簡便な形のシート・ミュージックである。

⑷ 「私たちは貧しかったから」

“Because We Were Poor” by C. R. Dockstader, New York（1878）

There’s a dear spot in Ireland
That I long to see
It’s my own native birth place
And it’s heaven to me.
Shure my poor widowed mother lived there all alone
With my brothers and sisters
T’was a bright happy home.
Shure we hadn’t much money
But my own mother dear,
To me gave her blessing,
Bade my heart be good cheer,
Then the shadow of poverty
Darkened our door,
And left Ireland and mother, because we were poor.…（下線筆者）

この歌のキーワードは「未亡人の母」と「貧困」である。切々と，故国での幸せだったころを天国だったと回想し，歌っている。しかしその愛する故郷を捨て，アメリカへ移民しなければなければならなかった理由を，「貧困の影が我が家のドアを陰鬱にし／私は母を置いてアイルランドを去った　なぜなら私たちは貧しかったから」と明確に述べている。⑵番の歌のように，この歌に登場する母は夫を失くしている。自分はもう二度と母にも兄弟姉妹にも会えないだろうと孤独の身を嘆く。幸せだった日々との対比が切実である。1878 年にニューヨークのブロードウェイの K. Dehnhoff によって出版された。表紙は人物などの絵は無いものの，唐草模様が文字の周りを取り囲み，活字も飾り文字などにするなど丁寧なつくりである。

2　残してきたアイルランド

実際，移民せざるを得なかった 19 世紀のアイルランドの実情とはどのようなものだったのだろうか。『移民と追放者』（*Emigrants and Exiles*）の著者カービー・A・ミラー（Kerby A. Miller）は，移民の時期を幾つかに区切っているが，大飢饉（The Great Famine）を境として，大飢饉前の移民期を 1815–1844 年，大飢饉の移民期を 1845–1855 年，大飢饉後の移民期を 1856–1921 年と三区分している。

1845 年から 1849 年にかけてアイルランドを襲った，主食であるジャガイモのブライト病（the potato blight）による不作のため，人口 800 万人のうち多くの人々が飢餓のため次々と倒れていった。100 万人以上が飢餓と疫病で死亡したと言われている。飢餓と疫病から逃れるために，180 万人が北アメリカに移民した（Miller 280）。大飢饉前の移民は，イギリスからの独立や，経済的な上昇，機会と豊かさを求めてのものだったが，大飢饉時の移民の目的は，飢えで死なないため，生きるためにアイルランドを脱することであった（Miller 298）。

1850 年代初頭までに飢餓と疫病は収束しつつあったものの，農民に対する強制立ち退（eviction）は依然として大規模に続いていた（Miller 299）。ジャガイモが不作のため借地代を払えない小作人に，地主が強制的に，しばしば警官を使って立ち退きを求めた。このように，19 世紀半ばのアイルランドには，食べるものがない，住むところがない，仕事がないといういくつもの要因のために移民せざるをえない状況にある人々が多数存在したのである。

3　19 世紀のアメリカにおけるアイリッシュ・アメリカン

19 世紀に，棺桶船とも呼ばれた劣悪な環境の移民船に乗ってアメリカ東海岸を目指してやってきた移民たちは，アイリッシュ・キャンプや アイリッシュ・アパートメントと呼ばれる共同住宅に住み着いた。現在，ニューヨークのローワーイーストサイドのオーチャード・ストリートには当時の移民たちが住んだテネメントハウスが保存され，ミュージアムとなっている。現地の説明書きには，このテネメントハウスは 1863 年から 64 年の間に建てられたとある。採光も通風も悪い劣悪な環境の中で，一部屋に家族で何人も住むという状況だった。

資金も技術も乏しい当時のアイリッシュ移民は，アメリカ社会では底賃金で過酷な労働に甘んじた。アイリッシュの男たちは運河建造，鉄道設置，ビル建設や，港湾労働などの力仕事に携わり，女たちは家庭のメイドになるか，繊維工場などで働いた。しかし新しい環境に馴染めず，酒に溺れる者も多くいた。貧しさゆえの犯罪率も高かった。ニューヨークでは，1850 年代，アイリッシュは，アメリカ人やドイツ系移民に比べると，犯罪率が 5 倍高かったという（Miller 320）。

プロテスタントのアメリカ人からは，アイリッシュはカトリックであるという理由で排除された。酒癖が悪い，粗暴，無知だと非難され，アメリカ人からはホワイト・ニグロと揶揄され，差別を受けることもあった。アイリッシュに対する偏見から，ニューヨークやボストンなどの求人広告には “No Irish Need Apply”「アイルランド人の応募はお断り」という文言が見られることもあった。おしなべて 19 世紀は，アイリッシュ・アメリカンにとって苦難の時代だった。そのようなアイリッシュの窮状が，歌には色濃く現れている。

4　20 世紀のアイリッシュ・ソングにおけるアイルランド像

20 世紀のアイリッシュ・ソングに目を向けよう。20 世紀になると，アイリッシュ・アメリカンが祖国アイルランドを見る眼差しに変化が見られる。その理由として，アイルランドを実際に知っている世代よりも，知らない世代が増えてきたということが第一に挙げられる。また，アイルランド系アメリカ人たちが世代を重ねるうちに社会的に上昇し，豊かになっていったということが第二に挙げられる。歌においては，父母や祖父母から聞いた理想郷的なアイルランドの情景への憧れが描かれている。

⑸ 「天国のひとかけら，そう　それをアイルランドと呼ぶ」

次は，1914 年ニューヨークの M. Witmark によって出版された「天国のひとかけら，そう　それをアイルランドと呼ぶ」である。故国アイルランドの描き方が以前と変化したことに注目しよう。

“A Little Bit of Heaven: Shure They Call It Ireland” by J. Keirn Brennan, New York（1914）

Have you ever heard the story of how Ireland got its name?
I’ll tell you so you’ll understand from whence old Ireland came;
No wonder that we’re proud of that dear land across the sea,
For here’s the way me dear old mother told the tale to me:

Shure, a little bit of Heaven fell from out the sky one day,
And nestled on the ocean in a spot so far away;
And when the angels found it, shure it looked so sweet and fair,
They said, “Suppose we leave it, for it looks so peaceful there:”
So they sprinkled it with star dust just to make the shamrocks grow,
‘Tis the only place you’ll find them, no matter where you go;
Then they dotted it with silver, to make its lakes so grand,
And when they had it finished, shure they called it Ireland.

‘Tis a dear old land of fairies and of wond’rous wishing wells,
And no where else on God’s green earth have they such lakes and dells!
No wonder that the angels loved its Shamrock-bordered shore,
‘Tis a little bit of Heaven, and I love it more and more.（下線筆者）

表紙には，“The Heart of Paddy Whack” という作品のなかで Mr. Chauncey Olcott によって歌われたと記されている。チョーンシー・オルコットは，アイリッシュ系の歌手で，当時人気を博し，数々のミュージカルに出演していた。この歌の作曲者は Ernest R. Ball で，他にも “Mother Machree”, “Who Knows?”, “My Dear”, “When Irish Eyes Are Smiling” など数々のアイリッシュ・ソングを作曲した人物である。

J. Keirn Brennan による歌詞では，アイルランドという国の成立について，愛する母が語ってくれた神話的とも言える説明がなされている。ある日，空から天国のひとかけらが海のなかに落ちてきて，それがアイルランドになり，天使たちがそこに星屑をまき，シャムロックになったと歌う。アイルランドは，天使が賞賛するほど気持ちよく，美しく，平和な場所として描かれている。「これが妖精と願いを叶える不思議の泉の愛しい国／神の地上の他のどこにもこんな湖と谷はありません！／天使たちが　シャムロックが茂る岸辺を愛したのも不思議ではありません／天国のひとかけら　それが私にはますます愛おしい」と感傷的な歌詞が続く。この歌では，アイルランドを説明するのに，「天国」や「天使」が登場している。飢餓や貧困が歌われた 19 世紀の歌とはアイルランド像がかなり変化していることがわかる。ここで歌われているのは，神話の世界のアイルランド，想像上のアイルランドの姿である。

⑹ 「それがただアイルランド人の夢だ」

次は，1916 年ニューヨークの W. Witmark & Sons によって出版された「それがただアイルランド人の夢だ」である。これは，フレデリック・マッケイ演出の喜劇『ブロードウェイとバターミルク』でアメリカの喜劇女優歌手ブランチ・リングによって歌われ，大ヒットした。表紙にはシャムロック柄の帽子をかぶった女性の絵とともに，リングの写真も載っており，当時の人気の高さが伺える。

“‘Twas Only an Irishman’s Dream” by John O’Brien & Al Dubin, New York（1916）

Sure you should have seen the scene I saw,
‘Twas just the other night,
Oh, I’ve never seen the likes of it,
‘Twas such a pleasin’ sight,
I was happy for a moment,
But now I’m feeling blue,
For what I saw, I’ll see no more,
‘Twas too good to be true.

Sure the shamrocks were growing on Broadway,
Ev’ry girl was an Irish colleen.
And the town of New York was the county of Cork,
All the buildings were painted green,
Sure the Hudson looked just like the Shannon,
Oh, how good and how real it did seem,
I could hear mother singin’ ‘The sweet Shandon bells ringin’,
‘Twas only an Irishman’s dream.（下線筆者）

この歌のキーワードは「アイルランド人の夢」である。「シャムロックがブロードウェイに生い茂り／行きかう女の子は皆アイルランド娘／ニューヨークの街はコーク州／建物は皆緑に塗られて

いる／ハドソン川はシャノン川に見える／ああなんてすてきで　なんて本物のように見えたか／母が「優しいシャンドンの鐘が鳴る」を歌う声が聞こえた／それがただアイルランド人が見る夢だ」と歌う。

シャムロックがニューヨークの真ん中に生い茂り，ニューヨークがアイルランドのコーク州になり，アメリカ娘がアイルランド娘に変わり，ハドソン川がシャノン川に変わる夢，自分たちが今いるアメリカがアイルランドに変わってしまう夢。センチメンタルではあるが，故国アイルランドを懐かしむ気持ちが溢れている。ただ，あくまでも自分がアイルランドに戻るという選択ではなく，現時点で自分がいるニューヨークがアイルランドに変わればいいのにという願望であることに留意する必要がある。懐かしいアイルランドではあるものの，今の生活を捨ててまで帰る心意気はなく，そもそもアメリカがアイルランド化する夢など実現することがないのは了解している。もし本当にニューヨークがシャムロックの生い茂る野原になってしまったら困ってしまうのは自分であり，そのジレンマを抱えているからこそ，歌詞はよりセンチメンタルに響く。

⑺ 「アイルランドは天国に違いない，なぜなら母がそこからやってきたから」

“Ireland Must Be Heaven, For My Mother Came from There” by Joe McCarthy, New York (1916)

I’ve often heard my daddy speak of Ireland’s lakes and dells,
The place must be like Heaven, if it’s half like what he tells;
There’s roses fair and shamrocks there, and laughing waters flow,
I have never seen that Isle of Green.
But there’s one thing sure, I know.
Ireland must be Heaven, for an angel came from there,
I never knew a living soul one half as sweet or fair,
For her eyes are like the star-light,
And the white clouds match her hair,
Sure Ireland must be Heaven, for my mother came from there.（下線筆者）

1916 年にニューヨークの Leo Feist によって出版された歌である。この歌のキーワードは「父母」と「天国」と「天使」である。父から聞いたという断り書きから始まるこの歌は，自分自身はアイルランドを実際には知らないことを明示している。「そこには美しいバラにシャムロック　そして笑いさざめく川が流れる／私はその緑の島を見たことがない／だがただひとつ確かなことは／アイルランドは天国に違いない　なぜなら一人の天使がそこからやってきたから」と歌う。

父の語るアイルランドは，美しいバラとシャムロックに溢れ，笑いさざめく川が流れ，さらに天使のような母がそこからやってきたのだから天国のように違いないと確信する。この歌には，飢饉，地主の横暴，未亡人の母といった過去の不幸の要素は存在しない。故国は天使が住む，天国のような場所として描かれている。前出の⑹の歌では，シャノン川，コーク州，アイルランド娘という実在するものでアイルランドを描いていたのに対し，この歌では Heaven や angel といった宗教的な用語を繰り出してアイルランドを神話的な存在へと持ち上げている。表紙は，シャムロックやバラとともに，海岸や古城に至る小道といった郷愁をそそるイコンに満ちている。

⑻ 「わたしの欲しいものはすべてアイルランドにある」

“All That I Want Is In Ireland” by Jeff Branen, New York (1920)

I'm over here and they're over there,
There's a wide strip of water between them and me
But be-dad. I can swim it if put to the limit
I'm goin' to go back to my home o'er the sea.
The Shamrocks, the Shannon, the Lakes of Killarney,
The green rolling hills and the valleys between I had to forsake them, shure I couldn't take them
I left them along with my Irish colleen.
The voice of my mother is calling me homeward
And I sigh for a puff of my daddies dudeen
Shure'en all that I had and all that I have
And all that I want is in Ireland.(下線筆者)

この歌では,「母の声が私を家へと呼んでいる／父のパイプの煙がなつかしい／私が昔持っていたもの　私が今持っているもの／そして今欲しいもの　それはすべてアイルランドにある」と歌われる。アイルランドには過去，現在，未来にわたって自分の欲するものすべてが備わっている。つまり，自分がいるアメリカには「今」という時間しかないが，アイルランドは永遠だということである。アイルランドには，父も母もアイルランド娘もいる。美しい湖，川，シャムロックもある。それは自分が今いるアメリカには欠けているものだ。父は健在で，平和にパイプをくゆらしている。この歌は，それまでに歌われたステレオタイプとしてのアイルランドを，永遠の時間軸の中に位置付けている。しかし，そのすべてを備えた永遠のアイルランドという姿は，突き詰めれば，どこにも「存在しない場」「失われた場」である。理想郷としてのアイルランドを描いた歌は，1920 年代，この歌において頂点を極めたように見える。

この歌は，1920 年にニューヨークの A. J. Stasny Music Co. によって出版された。歌詞は Jeff Branen, 音楽は Evans Lloyd である。ニューヨークは劇場が立ち並ぶブロードウェイがあり，ミュージカルが盛んな地である。アイルランド系の住民も多い。アイリッシュによる音楽が，20 世紀初頭に花開いた場所の一つである。

⑼ 「戻りたい，アイルランドは自由だ」

“I Want to Go Back, Ireland Is Free” by A. Seymour Brown, New York (1922)

I got a letter yesterday
And you'll believe me when I say
I never knew how happy I could really be
And so I pack'd my little grip
I'm on my way to take a trip

My heart is yearning and I'm returning,
To a bit of Heaven o'er the sea.

I want to go back once more to the town of Ballymore
Where all the little Shamrocks grow
To all the folks who love me so
They'll be waitin' at the station, just to start the celebration.
There'll be Bag-pipes, Rag-pipes ev'ry kind of pipes a-playin'
Tunes I love so well
Bells a-ringin'
My Dad a-singin'
Skin am arink a roodle,
Sure I'm goin' off me noodle
Oh, the moon's shining bright on Killarney tonight,
That's the one spot on earth I long to be
I'm goin' to see my dear old Mother Machree
She'll dance an Irish reel with me,
So come on and join the Jubilee,
A divil a-time there's goin' to be.
Ireland is free. I want to go.

I've been away for quite a while
And now I'm goin' back in style
I'm just the fam'ly black sheep
I just had to roam.
I know your mouth would water too for my old Mother's Irish stew,
I've got to go there if I must row there,
After all to me
It's Home Sweet Home.（下線筆者）

「私は小さな旅行鞄を荷づくりして／旅に出た／私の心は恋い焦がれ　戻っていく／海を越え天国のひとかけらへと」とあるように，この歌でも，⑸番の歌のように，アイルランドは「天国のひとかけら」と表されている。「昨日 1 通の手紙を受け取った」と始まるが，この歌の出版年の前年 1921 年に英国・アイルランド条約が締結され，1922 年に条約が批准され，アイルランド南部 26 州はアイルランド自由国となった。その後，憲法を制定し，国名をアイルランドにしたのが 1937 年，アイルランド共和国として完全な独立国になったのは 1947 年である。これは，祖国の自由への第一歩を反映した歌である。自由になったアイルランドに自分も戻りたいと歌う。シャムロックが茂り，音楽が奏でられ，村人が歓迎してくれる。父もいる。19 世紀の歌が未亡人である貧しい母を歌っていたのとは対照的に，20 世紀の天国のようなアイルランドを言祝ぐ歌で，父は不在ではない。⑻番の歌のように父がパイプをくゆらせたり，⑼番の歌のように父が歌を歌ったりする情景は，豊かさと平和の象徴である。

しかし，戻りたいと願いながらアイリッシュ・アメリカンたちが実際にアイルランドに戻ったかというと，それはまた別問題である。都会生活に慣れた若者が，単調な田園生活になじむことができるかは疑問である。また，戻ったからといって，自分の望む仕事が見つかるとは限らない。歌では，あくまでも想像のアイルランド，理想的なアイルランドの姿を感傷的に歌っているにすぎない。

以上のように，19 世紀の歌と 20 世紀の歌に歌われるアイルランド像にはかなり隔たりがあることがわかる。19 世紀の歌は，自分たちが追放され，または見限ってきた故国の惨状を歌ったものが多かったが，20 世紀の歌ではアイルランドは「天使」が住む「天国」のように理想化された姿として描かれている。さらに，1922 年の歌では，自由へ近づくアイルランドの姿を喜びに満ちて歌っている。

ウィリアム・H・A・ウィリアムズは，このエデンの園のような神話的アイルランドは，「失われた地」（the “lost” land）という事実で，さらに強化されたと述べる。この美しい地は，時間と大西洋という距離によって，アイリッシュ・アメリカンにとって手の届かないものである。かくして，エメラルドの島は，郷愁に満ちた憧れの地としてあり続ける。アイルランドが故国ではないアングロサクソン系アメリカ人にとっても，これらの歌は郷愁を誘うものであった。そしてこのような理想的な田園風景を描いてアメリカ人にアイルランドに好意を抱かせることが，結果的に，アイリッシュに対してアメリカ人を好意的にさせることにつながったとウィリアムズは指摘している（231）。民族の文化のイメージが，民族のイメージ形成に関わるという指摘である。実際，1880 年代から 1890 年代に南ヨーロッパや東ヨーロッパから大量に押し寄せた移民に比べて，英語を話し，英国領民であったアイリッシュはまだましだとアメリカ人が感じ始めたという指摘もある（Dolan 104）。アイリッシュに対するアメリカ人の見方の変化には，このような歌の後押しもあった。

5　20 世紀初頭のアメリカにおけるアイリッシュ

20 世紀初頭になると，アイルランド系アメリカ人の世代が交替し，教育を受け，労働者階級から中産階級へ移っていく人々が増える。ジェイ・P・ドーランによると，アメリカ生まれの第二世代は，アメリカ文化とアイルランド移民文化を両者とも吸収して育っていった。1900 年までにアメリカ生まれのアイリッシュは 337 万人となり，アメリカ国外生まれのアイリッシュ 160 万人を凌駕する。ウースターでは，1910 年の公立学校の教師の半数以上をアイリッシュの女性が占めたという（93）。

世紀の変わり目になされたアメリカ全土の調査では，アメリカ生まれのアイリッシュ男性の 4 分の 1 はホワイトカラー職に就き（多くが教師であった），アイリッシュ女性もメイド職につくものが減り，反対に，10 人に 1 人が織物工場などの技術職についた（93）。アイリッシュ男性は警察官や消防士になるものが多かった。ホワイトカラー職につくと，住む場所も中産階級の地域へと変わった。かつての移民向けの地区は新しくやってきた南ヨーロッパや東ヨーロッパからの移民たちへ譲り，アイリッシュは郊外の中産階級が住む地区へ移り住み，この新中産階級は「レース・カーテン・アイリッシュ」（lace-curtain-Irish）と呼ばれた。

最も成功したアイリッシュの例として，ボストンのフィッツジェラルド家とケネディ家を挙げよう。ボストン市長となったジョン・フィッツジェラルド（John Fitzgerald）（1863–1950）は，市民からは，ハニー・フリッツと呼ばれた。娘のローズ（Rose Fitzgerald）（1890–1995）はのちにアイルランド系のジョゼフ・P・ケネディ（Joseph P. Kennedy）（1888–1969）と結婚し，第 35 代大統領となるジョン・F・ケネディ（John F. Kennedy）（1917–63）の母となった。ジョゼフ・P・

ケネディは，駐英アメリカ大使も務め，階級の階段を駆け上がった人物である。

現在，アメリカ人のうち約 4000 万人，全人口の約 12 パーセントがアイルランド系であると言われている。19 世紀の求人広告で，“No Irish Need Apply” とアイリッシュが排除された時代から，アイリッシュに対する眼差しは大きく変わってきた。アイリッシュはアメリカ社会のなかで，マイノリティからマジョリティへと一歩ずつ近づいていった。

6　セント・パトリックズ・デイと虚構の田園

3 月 17 日のセント・パトリックズ・デイ（St. Patrick’s Day）のパレードは，1766 年の軍事行進に起源があると言われている。現在のような民間人のパレードになったのは，1919 年のロード・アイランドのプロヴィデンスのパレードである。第一次世界大戦中，プロヴィデンスのアイリッシュがアメリカへの愛国心を表明するとともに，アイリッシュとしての伝統を祝ってパレードを行った。その後，次第に規模が大きくなり，アイリッシュ・アメリカンは，この日，アイルランド人としての誇りを大体的に表明するようになった。毎年 3 月 17 日には，アメリカの多くの街で緑色の色があふれ，大通りでパレードが行われる。先ほど挙げた⑹番の「それがただアイルランド人の夢だ」という歌で，「シャムロックがブロードウェイに生い茂り／行きかう女の子は　皆アイルランド娘／ニューヨークの街は　コーク州／建物は皆　緑に塗られている／ハドソン川はシャノン川に見える」と歌われた光景が，まさに現代のニューヨークなどの都市に出現したと言える。移民がかつて夢見たことが，一年に一度，セント・パトリックズ・デイに実現したことになる。

ニューヨークの五番街にそびえる壮麗なカトリック教会であるセント・パトリック大聖堂は，ニューヨークに豊かに実ったアイルランドの象徴である。この教会の建立には数多くの成功したアイリッシュが関わった。また成功したアイリッシュの結婚式や葬儀なども執り行われた。ジョン・F・ケネディの弟ロバート・ケネディ（Robert Kennedy）（1925–68）も兄と同じく暗殺されたが，その葬儀もここで行われ，大勢の弔問者を迎えた。

現在，セント・パトリックズ・デイはニューヨークだけでなく，アメリカ各地の都市や世界各地の都市で祝われている。近年，日本の原宿でも 3 月 17 日には緑色が溢れる。アイリッシュが心情的にも，公道と言うオープンの場においても，最もマジョリティに近づくのがこの日かもしれない。

最後に，アイリッシュ・ソングにおけるアイルランド像についてまとめよう。20 世紀初頭の歌では，アイルランドは，緑なす丘と谷，歌う川，居心地の良い家，優しい村人という光景が描かれる。それは，19 世紀の歌のなかで描かれた飢饉，強制立ち退き，地主の横暴などで疲弊したアイルランドとは異なる，天国のような平和な理想的な田園風景である。この変化は，貧しいアイリッシュ移民が豊かなアメリカ人となっていった変化と呼応している。しかしこれはあくまでも想像上のアイルランドの姿であることを念頭におく必要がある。故国アイルランドに憧れ，戻りたいと歌いながら，実際に故国に戻るアイリッシュ・アメリカンは少数だった。

20 世紀半ばのアイリッシュも同じ状況にある。自伝や文学作品に描かれたアイリッシュに目を転じると，フランク・マコート（Frank McCourt）の自伝『アンジェラの祈り』（*‘Tis: A Memoir*）（1999）の主人公フランクは，1949 年，19 歳で単身ニューヨークに移民した当初苦労を重ねるが，アメリカで高校教師として生計を立て，生きていくことを選択する。その 10 年後に出版された，1950 年代のアイリッシュ・アメリカンを描いたコルム・トビーン（Colm Tóibín）の小説『ブルックリン』（*Brooklyn*）（2009）の主人公アイリーシュは，移民先のブルックリンからアイルランドの故郷の母の元へ戻り，故郷で新たな人間関係が生まれ，残ることを夢見る。しかし，アイリーシュ

は残りたくても，母を残してアメリカに戻らざるをえない状況に追い込まれてしまう。その追い込まれる状況には，遠いようでいて実は両国に存在する緊密な人間関係が絡んでくるのだが，本旨から外れるので，ここでは触れない。いずれにせよ，両主人公ともアメリカに骨を埋めるアイリッシュの一人となることを選んでいる。

時代順に 9 つの歌を検討したが，19 世紀から 20 世紀初頭のアイリッシュ・ソングについてまとめよう。貧しい移民として移住してからリスペクタブルな市民になるまでの数世代という時間軸と，アメリカとアイルランドを隔てる大西洋を挟んでの空間軸という，時間と空間における二重の距離感が，虚構の理想郷を生み出すことをより可能にしたと言える。アメリカ人の家庭にアイルランドの田園風景の絵が飾られることがあるほど，アイリッシュ自身だけでなくアメリカ人をも魅了する祖国としてのアイルランド像の虚構化が，以上紹介したポピュラーなアイリッシュ・ソングによって強化されたのである。

以上のように，人々に親しまれたアイリッシュ・ソングは，時代の流れのなかでのアイルランド系アメリカ人の心象風景と願望をわかりやすいかたちで映し出し，かつ，アイリッシュの民族イメージの形成にも関わった。このような役割を果たしたアイリッシュ・ソングだったが，独立に近づいたアイルランドを歌ったあと，アイリッシュ・ソングは 1920 年代以降，出版数が急速に減っていき，大衆文化の主役の座を，ミュージカルや映画に譲ることになる。

《註》

（1） アイリッシュ・ソングにおけるシャムロックの表象については，夏目博明「アイリッシュ・アメリカンのステレオタイプ ── シャムロック編」『青山スタンダード論集』第 5 号（青山学院大学，2010 年 1 月 16 日），アイリッシュ・ローズの表象については，夏目康子「アイリッシュ・アメリカンの歌におけるバラの表象」『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』（水声社，2016 年 7 月）で論じている。

（2） 歌の番号は，章にかかわらず，通し番号で記す。なお，歌の引用は途中までのものもある。

使用した Irish Song の Text

（1） “From Lovely Erin Sad I Come or The Emigrant From the Emerald Isle” Composed and Dedicated to the Friends of Ireland by Charles H. Gerken, Baltimore publ. by F. D. Benteen, Wm T. Mayo, New Orleans, 1848.

（2） “Barney, Come Home!” Words and Music by Wm. Chambers, the Irish Clown. A. W. Auner’s, Card and Job Printing Rooms, Tenth and Race Sts., Philadelphia, Pa, 1871.

（3） “Erin Go Bragh, Land of Sweet Erin & Come rest in this Bosom”, Sold, wholesale and retail, by L. Deming, No. 62, Hanover Street, 2d door from Friend St., Boston, 19c.

（4） “Because We Were Poor: Song & Chorus” Words & Music by C. R. Dockstader, Published by K. Dehnhoff, 767–769 Broadway, New York. Wiley B. Allen, Music Store, 211 First St. Portland Or, 1878.

（5） “A Little Bit of Heaven: Shure They Call It Ireland (How Ireland Got It’s Name, Song)” Sung by Chauncey Olcott in The Heart of Paddy Whack, Lyric by J. Keirn Brennan, Music by Ernest R. Ball, M. Witmark & Sons, New York, Chicago, London, 1914.

（6） “‘Twas Only an Irishman’s Dream” Sung with Great Success By American’s Foremost Singing Comedienne Blanche Ring, In Frederic McKay’s Production “Broadway and Buttermilk” A New Comedy with Songs and Girls by Willward Mack. Words by John J. O’Brien and Al Dubin, Music by Rennie Cormack, W. Witmark & Sons, New York, Chicago, London, 1916.

（7） “Ireland Must Be Heaven, For My Mother Came from There” by Joe McCarthy, Howard

Johnson and Fred Fischer, Leo Feist, New York, 1916.

（8） “All That I Had and All that I Have and All that I Want Is In Ireland” Words by Jeff Branen, Music by Evans Lloyd, A. J. Stasny Music Co., 56 W. 45th St., New York, 1920.

（9） “I Want to Go Back, Ireland Is Free” Music by Albert Von Tilzer, Words by A. Seymour Brown, A. V. T. Music Pub. Co., Albert Von Tilzer, Broadway, New York, 1922.

引用・参考文献

Dezell. Maureen. *Irish America: Coming into Clover.* New York: Anchor Books, 2002.

Dolan, Jay P. *The Irish Americans: A History.* New York: Bloomsbury Press, 2008.

Goodwin, Doris Kearns. *The Fitzgeralds and the Kennedys: An American Saga.* New York: St. Martin’s Press, 1987.

Lee. J. J. and Marion R. Casey eds. *Making Irish American: History and Heritage of the Irish in the United State.* New York: New York U. P. 2006.

McCourt, Frank. *‘Tis: A Memoir.* New York: Simon & Schuster, 1999. 土屋政雄訳『アンジェラの祈り』新潮社，2003 年。

Miller, Kerby A. *Emigrants and Exiles: Ireland and the Irish Exodus to North America.* Oxford: O. U. P. 1985.

Tóibín, Colm. *Brooklyn.* London: Viking, 2009. 栩木伸明訳『ブルックリン』白水社，2010 年。

Williams, H. A. William. *‘Twas Only an Irishman’s Dream.* Urbana: U. of Illinois P., 1996.

ミラー，カービー。ポール・ワグナー著，茂木健訳『アイルランドからアメリカへ ── 700 万アイルランド人移民の物語』東京創元社，1998 年。

結城英雄，夏目康子編著『アイリッシュ・アメリカンの文化を読む』水声社，2016 年。

The Image of Ireland in the Songs of Irish Americans:
From Exile to Heaven

NATSUME Yasuko

【Key words】 Irish Americans, Irish Song, immigrants, Heaven, exile

A great deal of sheet music, that is lyrics and scores of popular songs, were published from the 19th century to the early 20th century in America. As demand from music-loving Irish Americans was considerable, the themes of this sheet music were often about Ireland, and the songs were also called Irish Songs, or Irish Ballads. In this paper Irish Songs which take Ireland as their central theme will be examined from the viewpoint of how Ireland is depicted. Firstly, the description of the home country for Irish Americans in the 19th and 20th centuries in Irish Songs will be examined. Then the change of image of Ireland for them will be examined.

In some songs of the 19th century, serious and terrible conditions of Ireland are described; such as hunger and poverty owing to the Great Famine (1845–49), violence and eviction by landlords, sorrows of separated families, and exile from the home country. Even after arriving in America, the Irish could not forget the wretched conditions of Ireland. In the songs love for their father and mother and siblings, and longing for the beautiful nature of their homeland were told. In such cases mothers are often widows, very lonely and poor and helpless.

In the songs of the early 20th century, on the other hand, Ireland is described as an idealized country, sometimes just like as a piece of Heaven. Ireland is described as a beautiful-natured country with kind and warm-hearted folks, needless to say with a cherished father, mother and siblings. The change of the image of Ireland stemmed from the change of generation of Irish Americans in America. At the turning point of the century, the new generation of Irish Americans was not so poor as former generations. In addition, the new generation did not know so much about Ireland. They had merely heard of Ireland from their parents or grandparents. For them Ireland was often idealized in the songs.

In some songs of the 20th century, Ireland is the place to return back to from America. A critic pointed out that this idealized and mythical Ireland was reinforced by the fact that it was already the “lost” land, which included recognition of its distance from America. Moreover, this idealized rural landscape was attractive to Americans as well, which improved the image of the Irish, which had been harsh in the previous century, including the

racial epithet of the “White Negro”, the image of despised Irish Americans.

In the early 20th century the new generation, benefiting from education, moved to the middle class from the lower class. The white collar Irish moved from the districts inhabited by poorer immigrants to the middle class suburbs.

Today there are around 40 million people with Irish ancestry in America, that is 12 percent of the total population. The status of the Irish has greatly improved from that of former days, when the phrase “No Irish Need Apply” was sometimes found in the help-wanted advertisements.

Thus, Irish Songs represented Irish Americans’ heart and desires in a clear way in the 19th and 20th centuries. After the 1920s, however, the number of sheet music publications began to decrease. Irish Songs lost their popularity to musicals and movies, the new trend in popular culture in America.